毒　新　聞　【朝夕刊月ぎめ定価4400円（本体価格4074円＋消費税326円）】1部売り朝刊150円・夕刊50円　（第3種郵便物認可）

危険タックル

監督らの指示 認められず

「起訴求めず」書類送付へ

選手も不起訴見通し

日本大アメリカンフットボール部の選手による危険タックル問題で、警視庁が、内田正人前監督(63)と井上奨前コーチ(30)の明確な指示は認められないと結論づけたことが捜査関係者への取材でわかった。警視庁は近く、起訴を求めない内容の捜査結果を東京地検立川支部に送付する。タックルをした男子選手(20)については、傷害容疑で書類送検するが、被害者が寛大な処分を求めていることから、厳しい意見は付けず、男子選手は不起訴になる見通し。

危険タックルがあったのは、昨年5月6日、東京都調布市で行われた関西学院大との定期戦。パスを投げ終えて無防備だった関学大のクオーターバック(QB)の選手に、男子選手が背後からタックルし、QBはひざなどに全治約3週間のけがを負った。

男子選手はその後の記者会見で、試合前日に井上前コーチから、「監督が『QBを1プレー目で潰せば試合に出してやる』と言っていた」と伝えられたと証言。危険タックルは、内田前監督と井上前コーチの指示だったと説明した。

日大が設置した第三者委員会も昨年7月、危険タックルは内田前監督と井上前コーチの指示だったとする最終報告をまとめた。

警視庁は、関学大の選手側から刑事告訴を受け、内田前監督と井上前コーチが、傷害罪の共謀共同正犯や教唆犯に該当するかを捜査。試合画像を解析すると、井上前コーチが話した際、内田前監督がうなずく状況はなかったという。

捜査の結果、危険タックルの後、井上前コーチが無線機で「やりましたね」と声をかけたのは、内田前監督ではなく、別のコーチだったことが判明。内田前監督が使っていた無線機は故障しており、井上前コーチとのやり取りはなかったことが確認された。映像でも、井上前コーチが話した際、内田前監督がうなずく状況はなかったという。

警視庁が、内田前監督と井上前コーチのやり取りを証言した部員に改めて話を聞いたところ、1人は「勘違いだった」と訂正し、別の部員は「周囲から聞いた話を、自分が見たかのように話してしまった。（男子選手を）かばう気持ちがあった」と説明したという。

一方、内田前監督による「やらなきゃ意味ないよ」との指示は、内田前監督と男子選手の主張が異なり、事実関係が確認できなかった。井上前コーチは、「監督が『潰せ』と言っている」との発言について、負傷させる意図はなかったと説明しているという。

警視庁は、男子選手が試合数日前に先発メンバーを外されていたことから、精神的に追い込まれて、指示を拡大解釈した可能性があるとみている。

追い込まれ 明らか

早稲田大の友添秀則教授（スポーツ倫理学）の話「選手が『潰せ』の意味を誤認したとしても、危険タックルするほどに追い込まれたのだろう。指導者が日常的に、勝つためには手段を選ばず、絶対的な服従を求めてはいなかったか。大学スポーツ界全体が、選手教育のあり方を改めて点検する必要がある」

日大危険タックル問題を巡る主張や認定

	第三者委員会	指導者らの主張	警視庁の捜査結果（捜査関係者への取材）
試合前日	「監督はQBを潰せば試合に出してやると言っていた」（井上前コーチの発言）	「けがをさせる意図はない」（井上前コーチ）「指示したことはない」（内田前監督）	「潰せ」は「思い切り行け」の意味の可能性
試合直前	「内田前監督から『やらなきゃ意味ないよ』と言われた」（男子選手）	「『やらなきゃ意味ないよ』とは言っていない」（内田前監督）	事実を確認できず
タックル前後	内田前監督は男子選手を交代させず、事前に反則行為を了解と推認	「ボールを見ていて男子選手を見ていなかった」（内田前監督）	内田前監督はタックルを見ていなかった。内田前監督と井上前コーチの無線のやり取りはなかった

警視庁 映像解析 百数十人を聴取

日大アメフト部の危険タックル問題を巡っては、第三者委員会が男子選手の主張を全面的に受け入れ、内田前監督と井上前コーチの指示を認定したが、警視庁は、指示は確認されないという逆の判断をした。

警視庁は、殺人事件などを担当する捜査1課を投入し、部員や専門家ら百数十人から事情聴取し、試合映像の解析を進めてきた。捜査幹部は「刑事事件にするには、指示の明確な証拠が必要。当事者の供述だけでなく、客観的な証拠を慎重に積み上げた」と話す。

刑法は「正当な業務」による行為は罰しないと規定する。危険なタックルは試合では反則だが、スポーツ自体は正当な業務にあたり、即座に刑事罰に問えるわけではない。激しいぶつかり合いをルール上も想定しているアメフトでは、特にその判断は難しい。

前監督と前コーチは刑事責任を問われない見通しだが、男子選手がなぜ、危険タックルをせざるを得ない精神状態に追い込まれたのかは明らかになっていない。勝利至上主義に陥っていなかったか、指導に問題はなかったか、日大は改めて検証する必要がある。

日大の危険タックル問題を巡る経緯

2018年	5月 6日	日大選手が関学大選手に危険なタックルをして負傷させる
	19日	内田前監督が被害選手らに謝罪し、辞任を表明
	22日	タックルをした選手が記者会見し、前監督の指示と明かす
	23日	前監督らが記者会見し、指示を否定
	25日	日大学長が記者会見し、謝罪
	29日	関東学連が前監督らの除名処分を決定
	31日	関学大選手側が、前監督らを警視庁調布署に刑事告訴
		日大が第三者委員会を設置
	6月26日	前監督らの除名が正式決定
	29日	第三者委が中間報告で前監督らの指示を認定。チームが1か月半ぶりに全体練習
	7月30日	第三者委が、タックルは前監督と前コーチの指示で行われたとする最終報告書を提出し、2人を懲戒解雇に
	8月 7日	日大などが新監督就任を正式発表
	10月 4日	タックルをした選手が、約5か月ぶりに練習に復帰
	11月15日	前監督が日大側を相手取り、解雇は無効とした訴訟の第1回口頭弁論で、日大側が請求棄却を求める
19年	1月 9日	関東学連が、日大アメフト部とタックルをした選手の公式戦出場資格停止処分を、3月末で解除すると発表
	2月	警視庁が、前監督と前コーチの指示は認められないと結論づけたことが判明